

・ 調査結果の要約

エコ・アンケート結果について

（小中学生版「環境にやさしいライフスタイル実態調査」）

本調査は、平成12年12月に閣議決定された第二次環境基本計画の着実な実行を確保するための点検の一環として、国民の環境保全に関する取組の状況等の把握を目的に実施した調査と平行して、平成15年3月5日から3月20日にかけて、全国の小中学校の中から無作為抽出した計72校の小学5年生及び中学2年生それぞれ1,000名程度を対象に実施したものである（有効回答数は1,662人）。

調査結果の概要は以下のとおり。

1. 身のまわりの環境については、「森や川などの自然が豊か」「野生の動物や昆虫などたくさんの種類の生き物がいる」と認識する子どもは過半数を超えるが、海や河川、道路などの汚染を認識する子どもも多い。
2. 環境問題についての関心領域は幅広く、特に「水質汚濁」「森林減少」「地球温暖化」「大気汚染」に対する関心が高い。
3. 環境問題に対する考え方としては、「ものの無駄づかいをしたり、大量のごみを出したりする今の生活は、改めた方がよい」「環境を守ると生活が豊かになる」「将来の環境のことを考えると心配だ」「環境問題は自分にも影響がある問題だと思う」は広く浸透している。
4. 日常行っている環境保全行動として定着していることは、「水道の蛇口をきちんと閉める」「テレビや部屋などのあかりを消す」「ものは大切に使う」「ごみをきちんと分別する」であるが、「地域の掃除などに参加する」「買い物のときレジ袋をもらわない」「家族や友達などと環境問題について話し合う」の実施率は2分の1以下にとどまった。
5. これらの環境保全行動は、母親・テレビ・学校の影響で始めた子どもが多い。
6. 環境保全行動を行った際の気持ちは、「あたりまえのことをした」「気持ちがよかった」「世の中にとって良いことをしたような気持ち」「もっと行おうと思った」が上位にあり、環境保全に前向きな姿勢が示された。
7. 行っていなかった環境保全行動に対する今後の実施意向は、「水道の蛇口をきちんと閉める」「ものは長く使えるように大切に使う」「テレビや部屋などのあかりを消す」が6割以上と高く、このうち、「テレビや部屋などのあかりを消す」「水道の蛇口をきちんと閉める」は都市規模が小さくなるほどその行動意向が強くなっている。
8. 環境保全に重要な役割を担うものとしては、「日本政府・国」をあげた割合が27%で最も高い。
9. 環境問題に関する情報は、「テレビ・ラジオ」(78%)、「学校の授業や先生」(62%)が2大情報源となっている。
10. 学校における環境保全活動への参加経験としては、「環境問題について、先生の話聞いた」(56%)、「地域の掃除やごみ拾いなどに参加した」(50%)が半数以上にのぼる。

11. 「こどもエコクラブ」の認知率は18%である。

．アンケートの目的および実施状況

1．調査目的

環境省の諮問機関である中央環境審議会では、政府の環境保全に関する総合的かつ長期的な施策の大綱を定めた「環境基本計画」の進捗状況の点検を、毎年、実施している。この点検のため、国の各府省の取組状況に加え、アンケートにより国民や民間団体の取組状況等も調査することとしているが、本調査「エコ・アンケート」は、国民の取組状況調査の一環として、成人（20歳以上）を対象としたアンケートと共に、全国の小中学生（小学5年生及び中学2年生それぞれ1,000名程度）を対象に実施したものである。

2．実施状況

全国の小学校41校、中学校31校を全国から層化無作為抽出し、小学校は第5学年、中学校は第2学年の各クラスに回答するように依頼し、調査は教師のガイダンスに従う自記式で実施した。

有効回答数は計58校（1662人）、学校を母数とした場合の有効回答率は80.5%であった。

3．回答者属性（ ）内%

(1) 学齢別

小学校	中学校
755 (45.4)	907 (54.6)

(2) 性別

男子	女子
881 (53.3)	772 (46.3)

(3) 都市規模別

政令指定都市	10万人以上	10万人未満	町村
299 (18.0)	538 (32.4)	341 (20.5)	484 (29.1)

(4) 地域別

北海道・東北	関東	北陸	東海	近畿	中国・四国	九州
153 (9.2)	587 (35.3)	52 (3.1)	320 (19.3)	194 (11.7)	160 (9.6)	196 (11.8)

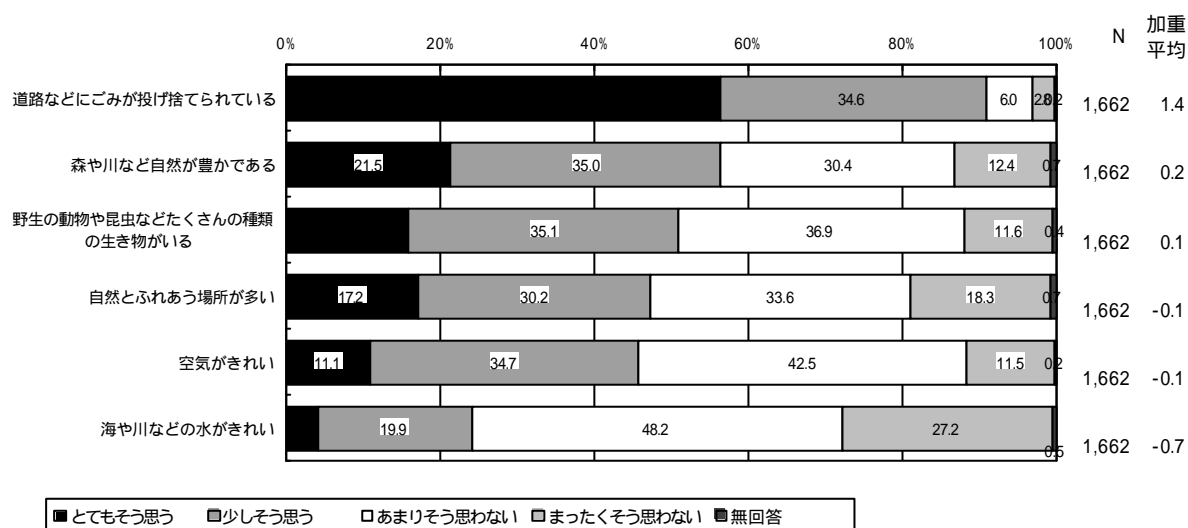
集計結果の概要

1. 身のまわりの環境認識（問1）

身のまわりの環境の認識を尋ねたところ、環境を肯定的にとらえたものとしては、「森や川など自然が豊かである」「野生の動物や昆虫などたくさんの種類の生き物がいる」の肯定率（「とてもそう思う」と「少しそう思う」の合計）がそれぞれ 57%、51%と 50%を超えた。「空気がきれい」「自然とふれあう場所が多い」についてはやや肯定率が低く、それぞれ 46%、47%となっている。

一方、環境の悪化を認識するものとしては、「道路などにごみが投げ捨てられている」の肯定率が 91%、「海や川などの水がきれい」の否定率（「あまりそう思わない」と「まったくそう思わない」の合計）が 75%となっている（図表1）。

図表1 身のまわりの環境認識（全体）

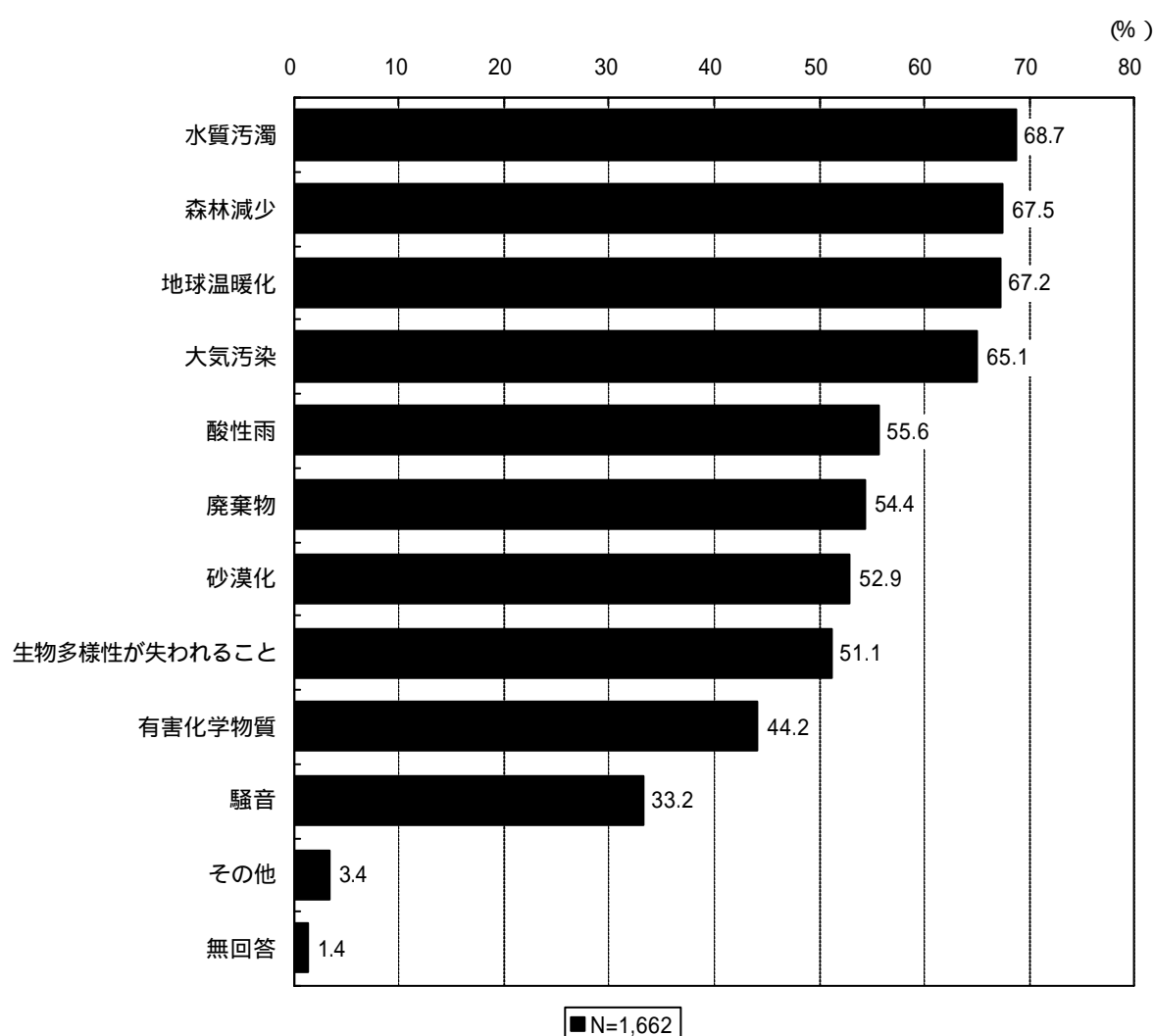


注) この項の加重平均は、「とてもそう思う」に2点、「少しそう思う」に1点、「あまりそう思わない」に-1点、「まったくそう思わない」に-2点を与えて算出した。

2. 環境問題の関心（問2）

環境問題への関心の有無を尋ねたところ、最も関心が高い項目は「水質汚濁」（69％）で、「森林減少」（68％）、「地球温暖化」（67％）、「大気汚染」（65％）と続く。また、これらに加え、「酸性雨」（56％）、「廃棄物」（54％）、「砂漠化」（53％）、「生物多様性が失われること」（51％）にも50％以上が関心を示しており、関心領域も幅広いものとなっている。これに対し、「有害化学物質」（44％）、「騒音」（33％）に対する関心はやや低くなっている（図表2）。

図表2 環境問題の関心（複数回答）（全体）

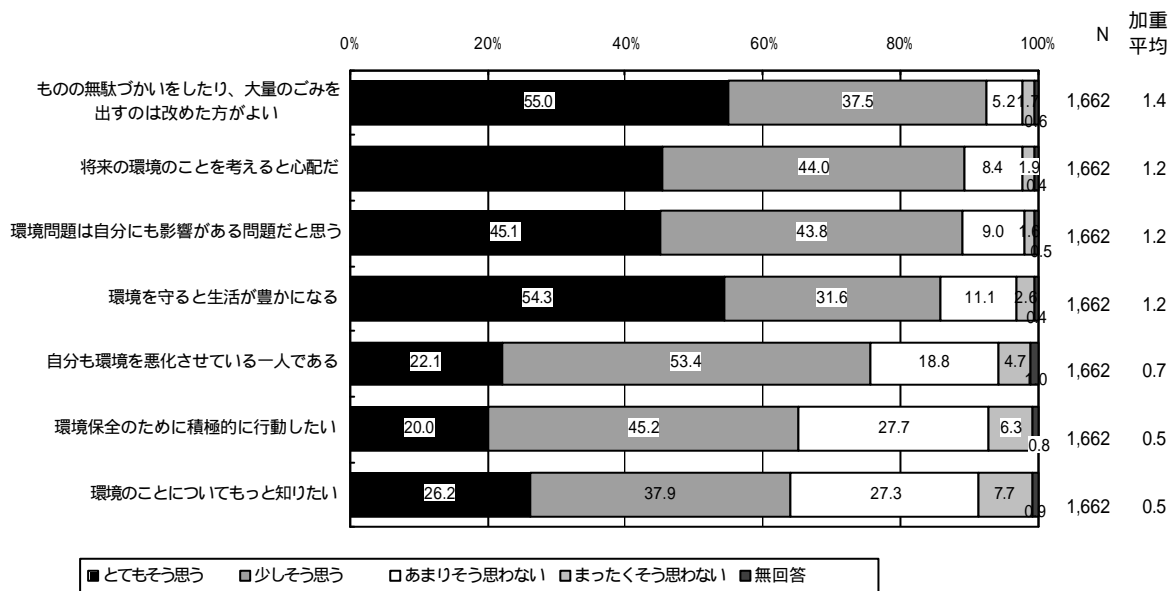


3. 環境問題に対する考え方（問3）

環境問題に対する考え方は、「ものの無駄づかいをしたり、大量のごみを出したりする今の生活は、改めた方がよい」「将来の環境のことを考えると心配だ」「環境問題は自分にも影響がある問題だと思う」「環境を守ると生活が豊かになる」の肯定率（「とてもそう思う」と「少しそう思う」の合計）は9割前後にのぼっており、これらの考え方が子どもの中で浸透しているといえる。

これらに比べると、自分自身の生活や行動に関する項目の肯定率はやや低く、「自分も環境を悪化させている一人である」76%、「環境保全のために積極的に行動したい」65%、「環境のことについてもっと知りたい」64%となっている（図表3）

図表3 環境問題に対する考え方（全体）



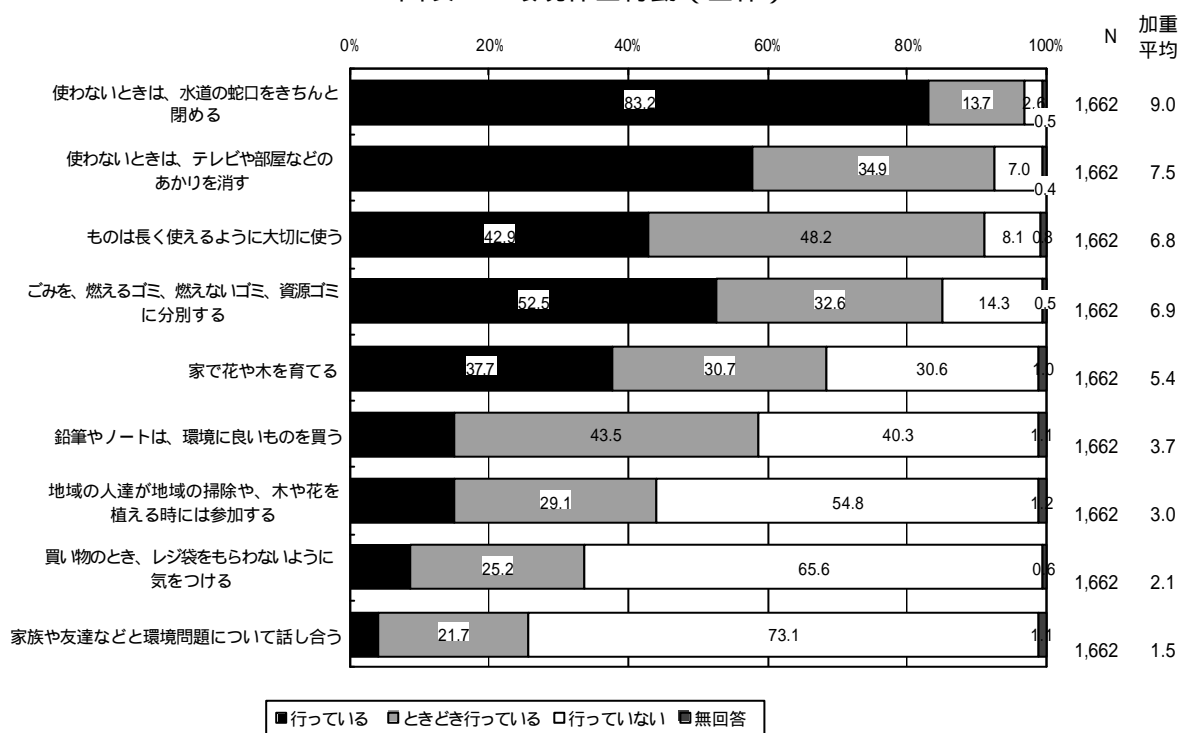
注) この項の加重平均は、「とてもそう思う」に2点、「少しそう思う」に1点、「あまりそう思わない」に-1点、「まったくそう思わない」に-2点を与えて算出した。

4. 環境保全行動の実態と今後の意向（問4）

4-1 環境保全行動

「水道の蛇口をきちんと閉める」「テレビや部屋などのあかりを消す」「ものは大切に使う」「ごみをきちんと分別する」という行動はほぼ定着し、「家で花や木を育てる」「鉛筆やノートは環境に良いものを買う」の実施率も高い。しかし、「地域の掃除などに参加する」「買い物のときレジ袋をもらわない」「家族や友達などと環境問題について話し合う」の実施率は2分の1以下にとどまった（図表4）。

図表4 環境保全行動（全体）

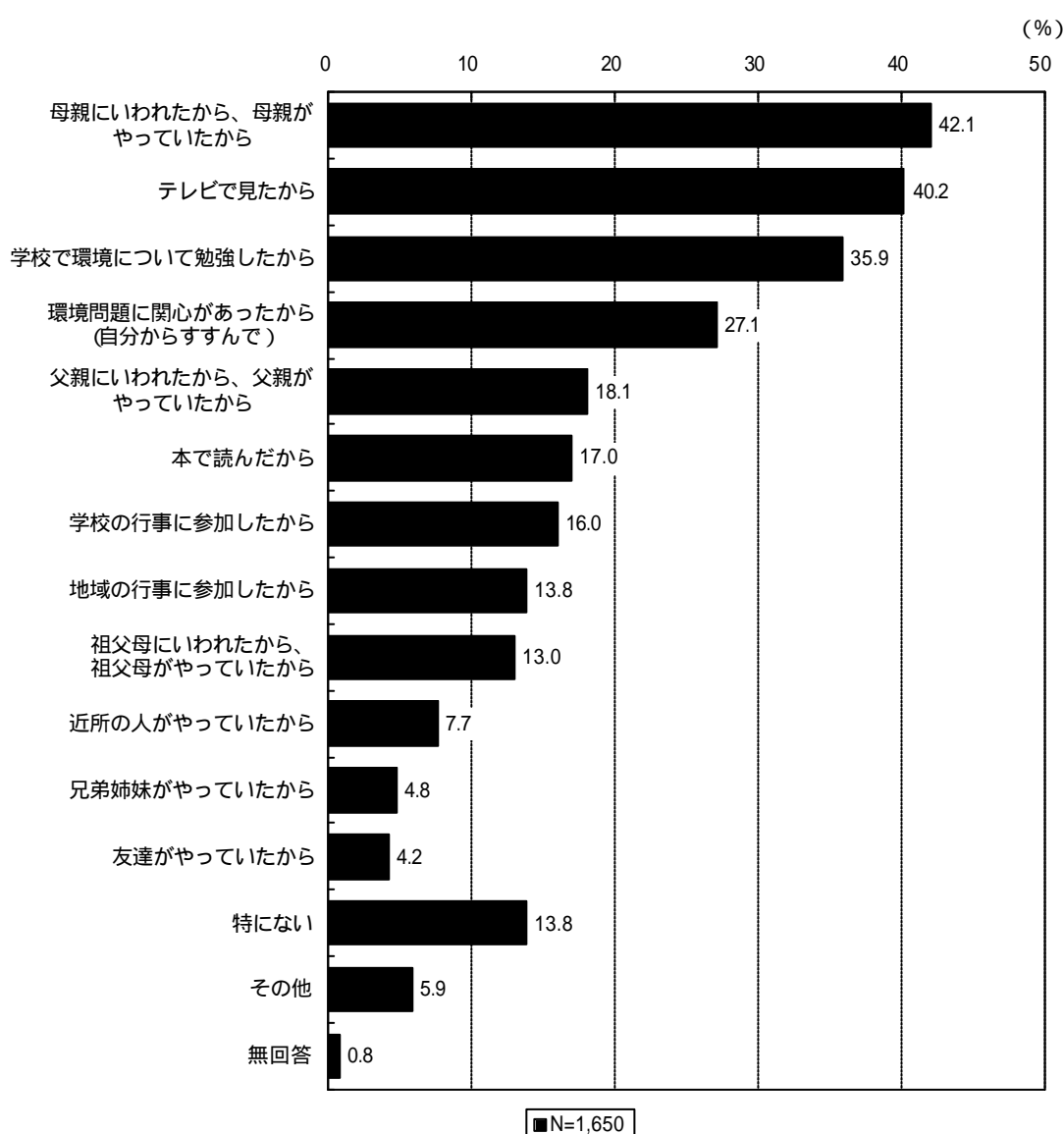


注) この項の加重平均は、「行っている」に10点、「ときどき行っている」に5点、「行っていない」に0点を与えて算出した。

4 - 2 環境保全行動の契機（問5）

4 - 1の環境保全行動を1つでも行った子どもに対し、行い始めた契機を尋ねたところ、「母親にいわれたから、母親がやっていたから」が42%、「テレビで見たから」が40%、「学校で環境について勉強したから」という回答が36%となっており、母親・テレビ・学校の影響が特に強い。この3項目以外では、「環境問題に関心があったから」(27%)が比較的多いが、父親、祖父母、兄弟姉妹といった母親以外の家族や友達、学校や地域の行事などの影響はあまりない(図表5)。

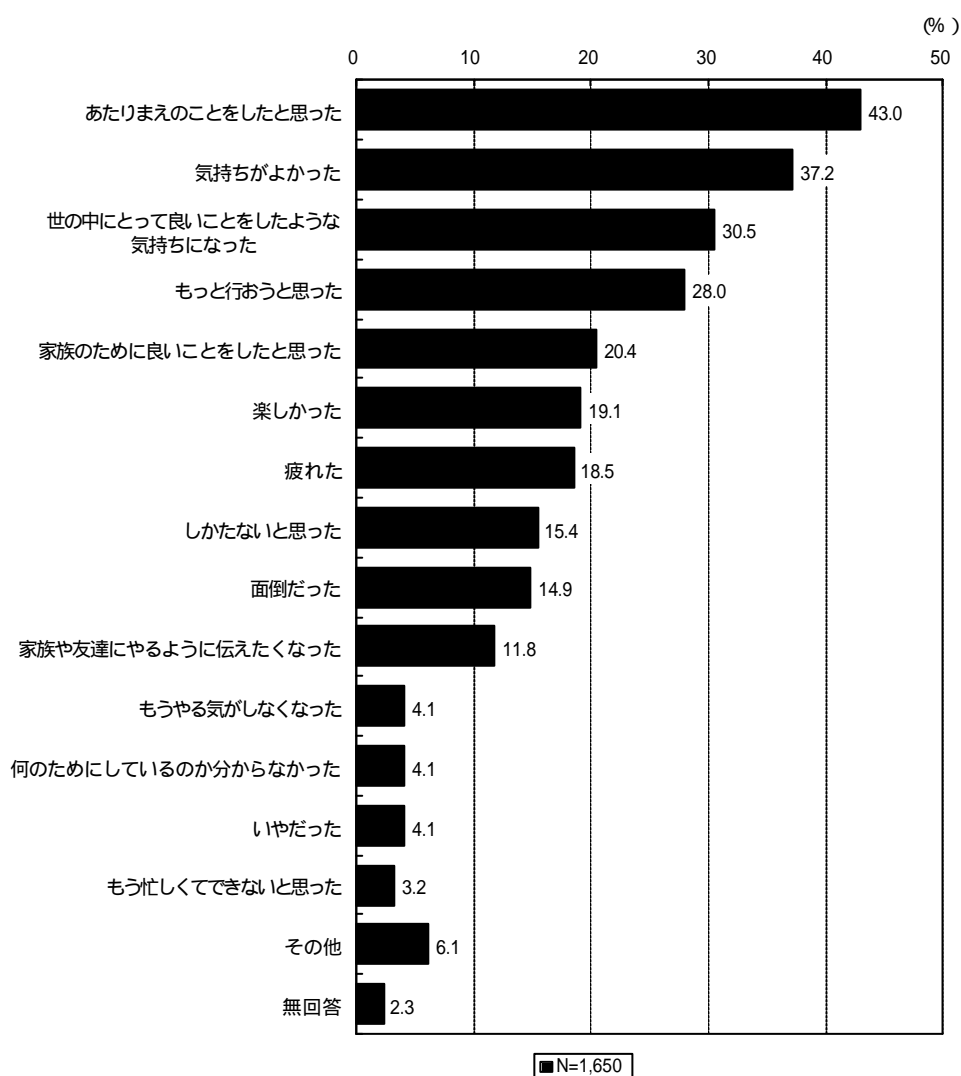
図表5 環境保全行動の契機（複数回答）(全体)



4 - 3 環境保全行動の際の気持ち（問6）

4 - 1 に示した環境保全行動を1つでも行った子どもに対し、行った際の気持ちを尋ねたところ、「あたりまえのことをしたと思った」（43%）、「気持ちがよかった」（37%）が4割前後で上位となった。これらに加え、「世の中にとって良いことをしたような気持ちになった」（31%）、「もっと行おうと思った」（28%）という気持ちも3割前後と強い。また、「疲れた」（19%）、「しかたがないと思った」「面倒だった」（各15%）、「もうやる気がしなくなった」「何のためにしているのが分からなかった」（各4%）という気持ちは相対的に弱く、環境保全行動に前向きに取り組もうとする姿勢が示されている（図表6）。

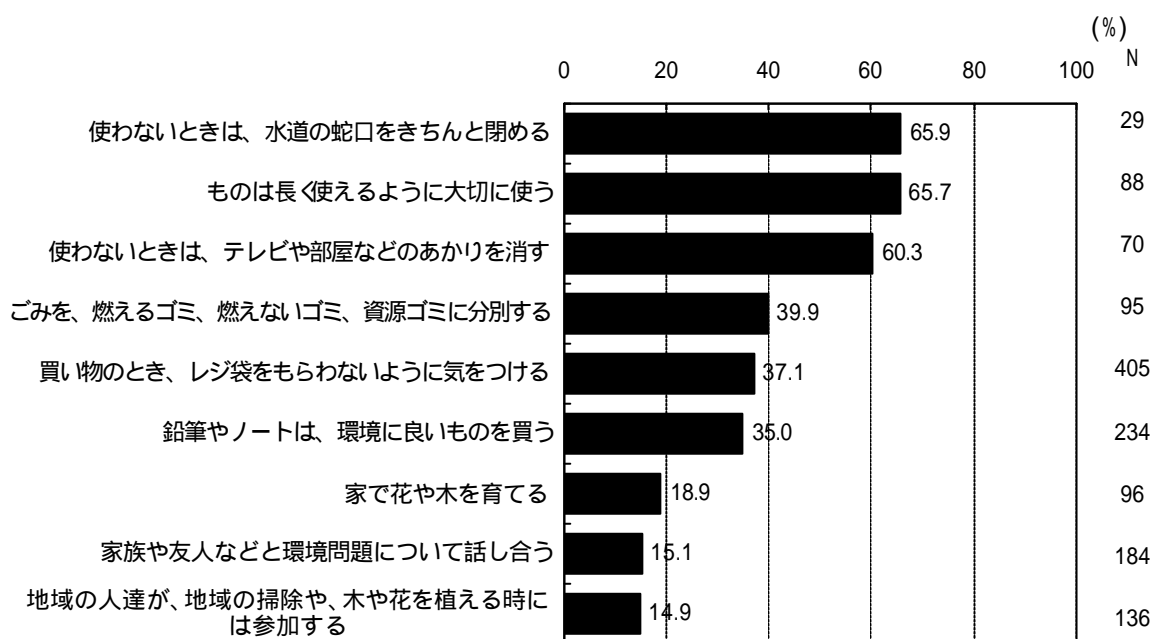
図表6 環境保全行動の際の気持ち（複数回答）



4 - 4 環境保全行動に対する今後の意向（問7）

4 - 1の環境保全行動のそれぞれについて「行っていない」と回答した子どもが、今後は行おうと思っている環境保全行動は、「使わないときは、水道の蛇口をきちんと閉める」（66%）、「ものは長く使えるよう大切に使う」（66%）、「使わないときは、テレビや部屋などのあかりを消す」（60%）が6割前後と上位を占めた。また、「ごみを、燃えるゴミ、燃えないゴミ、資源ゴミに分別する」（40%）、「買い物するとき、レジ袋をもらわないように気をつける」（37%）、「鉛筆やノートは、環境に良いものを買う」（35%）も3割にのぼった。しかし、「家で花や木を育てる」（19%）、「家族や友人などと環境問題について話し合う」（15%）、「地域の人たちが、地域の掃除や、木や花を植える時には参加する」（15%）は2割を下回った（図表7）。

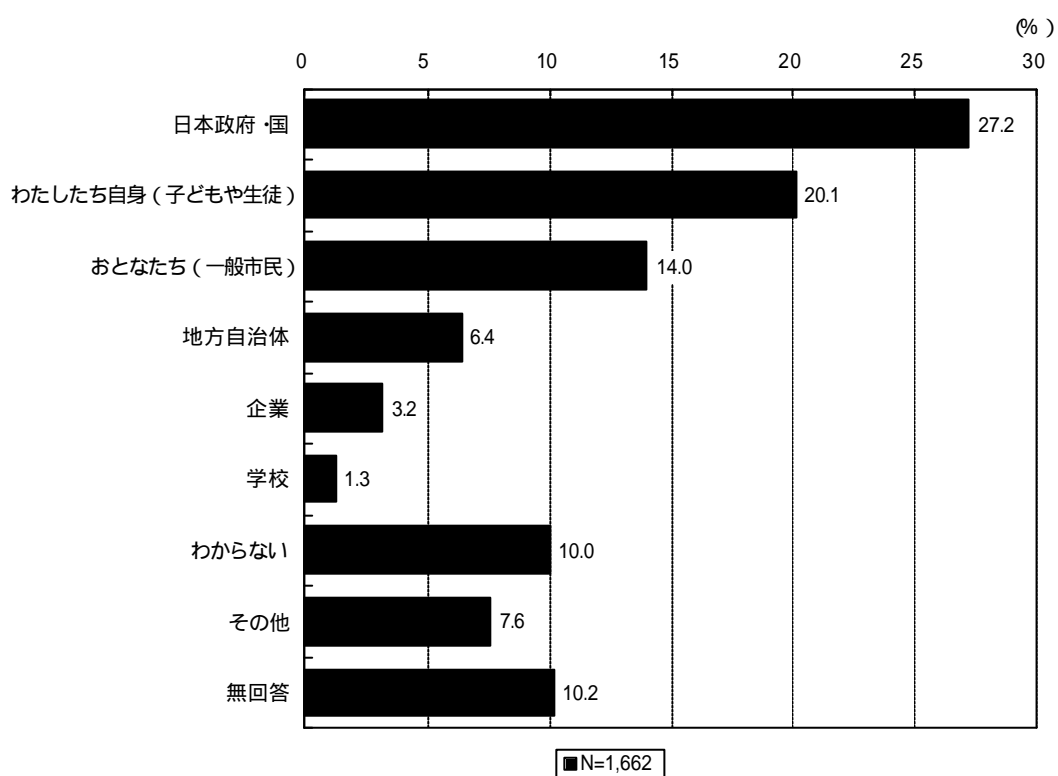
図表7 環境保全行動に対する今後の意向（複数回答）（全体）



5. 環境保全に重要な役割を担うもの（問8）

環境保全のために重要な役割を担うものを尋ねたところ、「日本政府・国」を選択した割合が27%で最も高く、「わたしたち自身（子どもや生徒）」（20%）がこれに次ぐ。以下「おとなたち（一般市民）」（14%）、「地方自治体」（6%）の順となっている（図表8）。

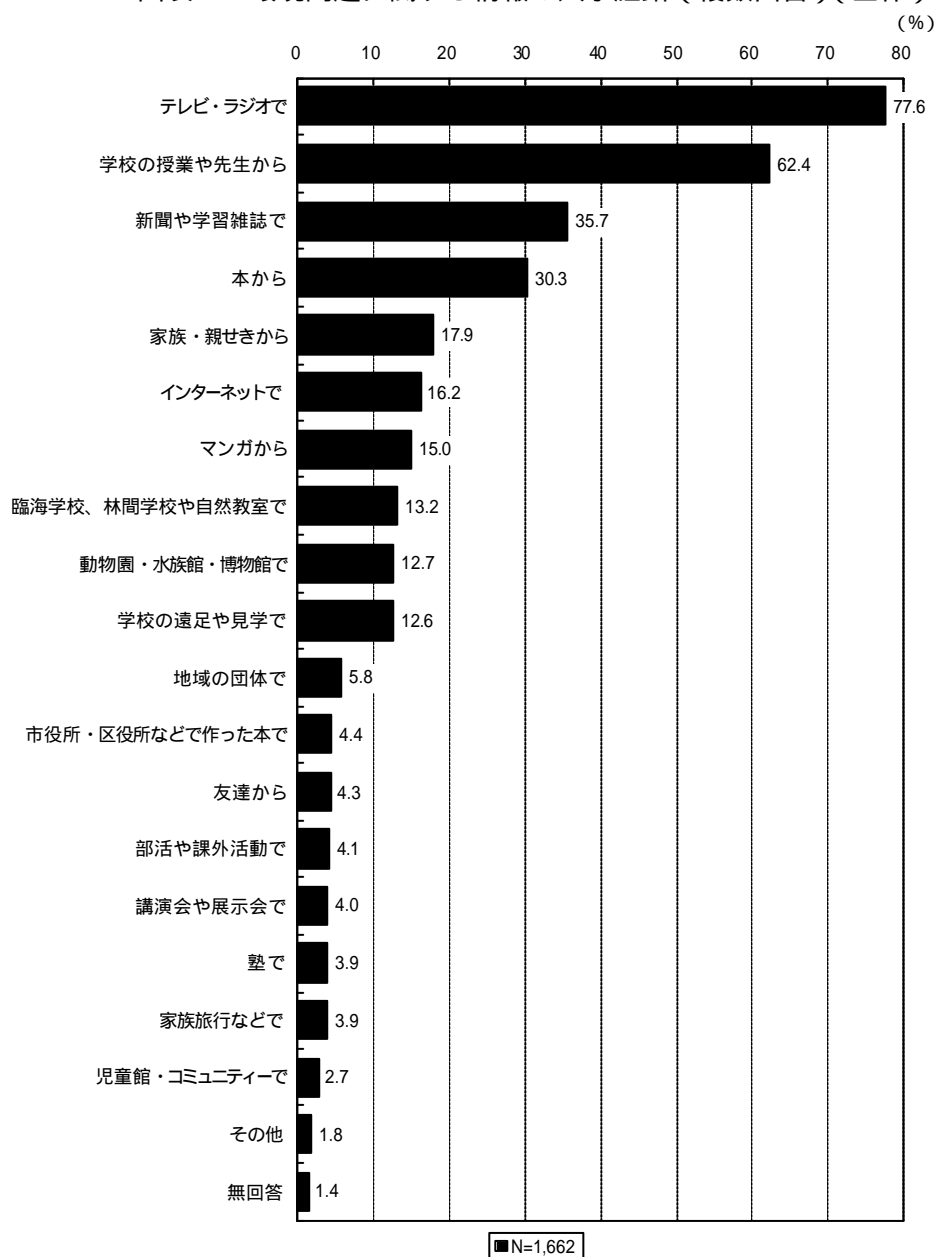
図表8 環境保全に重要な役割を担うもの（全体）



6. 環境問題に関する情報の入手経路（問9）

環境問題に関する情報の入手経路は「テレビ・ラジオで」（78%）と「学校の授業や先生から」（62%）が特に多く、2大情報源となっている。30～40%の支持率があったものとしては「新聞や学習雑誌で」（36%）、「本から」（30%）15～20%の支持率があったものとしては「家族・親せきから」（18%）、「インターネットで」（16%）、「マンガから」（15%）がある。一方、「市役所・区役所などで作った本で」（4%）、「友達から」（4%）、「部活や課外活動で」（4%）、「講演会や展示会で」（4%）、「塾で」（4%）、「家族旅行などで」（4%）、「児童館・コミュニティーで」（3%）などは5%を下回っており、情報としての知識獲得は盛んでも参加・体験型の知識獲得は少ない（図表9）。

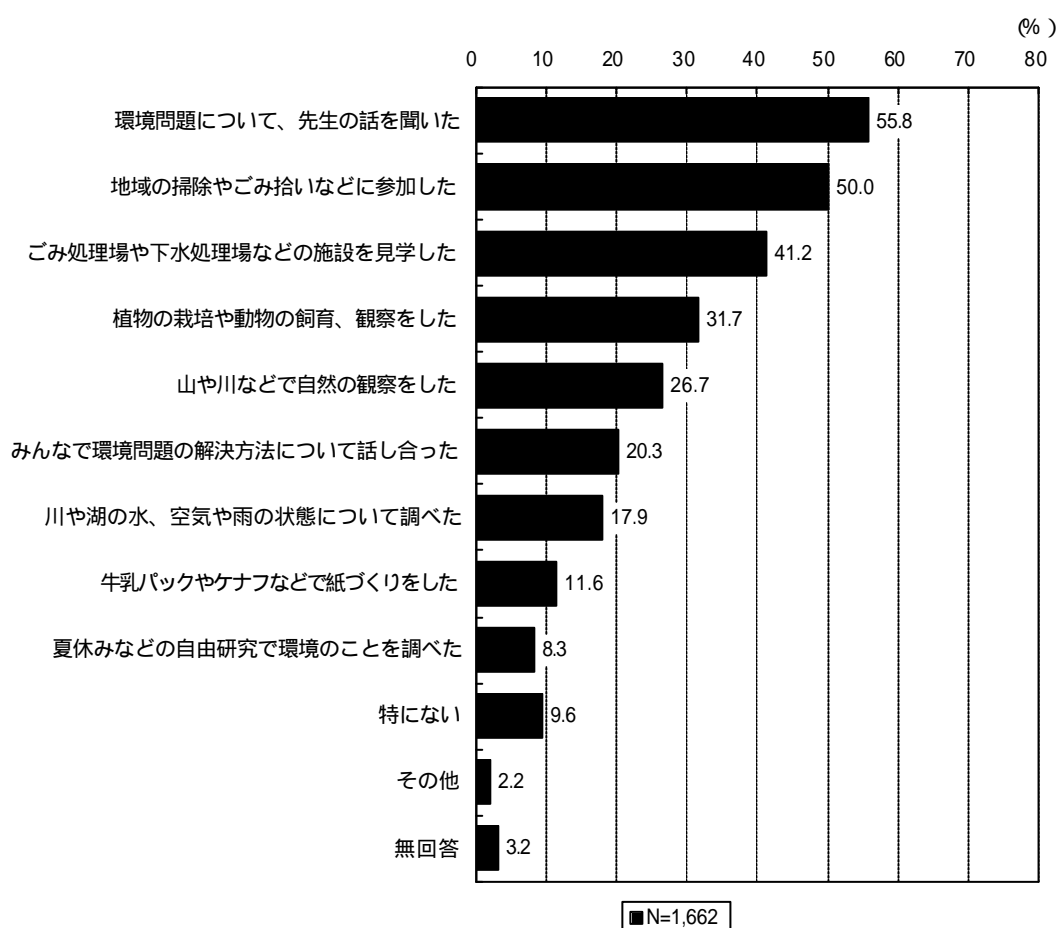
図表9 環境問題に関する情報の入手経路（複数回答）（全体）



7. 学校における環境保全活動への参加経験（問10）

学校における環境保全活動への参加経験を尋ねたところ、最も参加経験率が高かったのは「環境問題について、先生の話聞いた」（56%）で、次いで「地域の掃除やごみ拾いなどに参加した」（50%）となった。これらに加え、「ごみ処理場や下水処理場などの施設を見学した」（41%）、「植物の栽培や動物の飼育、観察をした」（32%）、「山や川などで自然の観察をした」（27%）の経験率も3～4割と比較的多い。しかし、「みんなで環境問題の解決方法について話し合った」（20%）、「川や湖の水、空気や雨の状態について調べた」（18%）の経験率は2割前後、牛乳パックやケナフなどで紙づくりをした」（12%）、「夏休みなどの自由研究で環境のことを調べた」（8%）の経験率は1割前後と低くなっている（図表10）。

図表10 学校における環境保全活動への参加経験（複数回答）（全体）



8. 「こどもエコクラブ」の認知（問11）

小中学生なら誰でも参加でき環境についての活動をする、「こどもエコクラブ」を「知っている」は18%で5人に1人弱の割合である（図表11）。

図表11 「こどもエコクラブ」の認知（全体）

